議員部門

八代 英太（やしろ えいた） 前衆議院議員

国会議員在任中、「障害者基本法」の制定に大きく貢献。障害者が主体的に福祉政策に関われる仕組みを作ろうと、各地域で障害者への理解を広める為の活動を展開。国際組織 障害者インターナショナル(DPI)の結成に従事し、日本の福祉外交を実施。障害者の自立と日本の社会福祉制度の発展に大きく寄与した。

推薦者 **後藤 庄二** 有限会社ボナファイド　代表取締役

日本のバリアフリー社会構築への足がかりを築く。

八代英太氏は国会議員在任中、障害者のための憲法と謳われる「障害者基本法」に多大な貢献を果たしたのみならず、その改正法の制定にも長年先頭に立って尽力してきた。25年の議員活動を通じて、国内外での精力的な福祉活動にも参加し、日本の社会福祉制度の発展に多大な貢献をしてきた。

1973年、ステージで転落事故に遭い、下半身麻酔、脊髄損傷者となり、車椅子生活を余儀なくされた。その後自身が障害者であるという立場から、自分が先頭に立って、障害者が主体的に福祉政策に関われる仕組みを作ろうと決意。1977年に参議院全国区に出馬、国政史上初の車椅子議員として国政に参加した。

1978年の本会議代表質問では、当時聞き慣れなかった「ノーマライゼーション」という言葉を掲げ、障害者差別撤廃への理念を追求した。翌79年の国際障害者年には、日本全国を車椅子で行脚して各地域で障害者への理解を広めていった。

さらに、障害者自身による国際組織、障害者インターナショナル(DPI)の結成に従事し、そのアジア太平洋議長を15年間務め、日本の福祉外交も強力に展開した。

1992年には、それまでの「心身障害者対策基本法」を見直し、今日の日本の福祉政策の礎となる「障害者基本法」制定の中心メンバーとして、衆参全会派賛成のもとでの法案成立に大きく貢献した。

2000年には、高齢者、身体障害者の移動の利便性と安全性の向上を目的とする「交通バリアフリー法」の成立に貢献、欧米に遅れをとる日本のバリアフリー社会構築への足がかりを築いた。

■福祉外交の実践（1984年／当時：47歳）

■障害者の声を国政に、施設訪問（1979年）